

2019年度 附属校・提携校養護教諭研修会

附属校教育研究・研修センター

11月2日(土)14:30~17:00、2019年度附属校・提携校養護教諭研修会を、立教大学 文学部教育学科 教授 秋葉昌樹 先生をお迎えし、朱雀キャンパスにて開催した。テーマは、「保健室のエスノメソドロジーについて」であった。参加者は、長岡京1、慶祥2、守山1、小学校1、平安女学院1、公立1、一貫1、計8人であった。

I 研究会の内容

(1) 秋葉先生と保健室の出会い

1990年半ばに保健室登校が話題になったが、教育関係の書籍に記述がなく、どこにも資料がなかったため、大学院時代に保健室の仕組みを論文化しようと研究を始め、小・中学校に出向いてフィールドワークを実施したのが始まりであった。近年は養護教諭向けに職務上の問題や、解決したい問題などを考えるワークショップを中心に研修をしている。

(2) エスノメソドロジーとは？

エスノ(人々の)メソドロジー(方法論)と訳される。

「保健室のエスノメソドロジー」とは、養護教諭の仕事の流儀⇒日常的にどのような仕事をしているのか、体験していることを振り返りながら経験を蓄積していく。反省的実践。

作業①: Post it (付箋) を使ってワークショップ

お題『昨日、学校であったこと』: それぞれ1項目ずつ1枚の付箋を使って書き出していく(10分)

作業②: 書いた付箋の中で、印象的なものに○印をつけてみよう。

嫌だったこと、印象に残っているものなど・・・

作業③: 書き並べた付箋を、時間と空間の軸で並べ替えてみよう。

タテに時間軸、横は空間や場所を考えて並べかえてみる。○印のついた付箋はどの位置にあるか？

作業④: 子どもたちに関わっている項目に色ペンなどでアンダーラインを引いてみよう。

全体の付箋の中で、アンダーラインを引いたカードは半分より多い？少ない？

多いからいいというものではなく、自分にとって心地よいと感じるかどうかを考えてみよう。

作業⑤: 同僚の先生など関わった項目に△や□等の記号を付けてみよう。

書き出して、地図のようにして見直してみる。どこで誰と？⇒一覧表にしたのがA3の配布資料

*A3資料「教師の仕事と教師文化に関するエスノグラフィー的研究」付表2の見方の説明

1-1、1-2と枝番号を付けているのは、1つの活動に2つの個別の項目があることを表す。

左側の数字は「ひとまとまりの活動」を表し、シーケンスと表現している。この表から見ても分かるが、教師の仕事は絶えず分断化されていて、間に別の仕事が入ってきている。

教員の仕事は、①自分の意志とは関係なく分断される、②仕事のモードが変わるといった特徴がある。

昨日のことを振り返って、付箋に書き出す作業を通してわかること

- ・自分の仕事を付箋に書き出して、時間や空間を意識して振り返ることで、自分の仕事を心地よくするための流儀を見つけていくことができる。
- ・ワークショップの作業を通じて、自分に合った最適の流儀をみつけていくきっかけになる。
- ・仕事でのストレスをためないようにするための手がかりになる。

- *次に空間的な位置づけを見てみよう！ ⇒ 学校組織としての教室配置の配慮が見えてくる。
冊子になっている配布資料のP.1「校舎見取り図」図1-1小学校を見て・・・
- ・小学校の教室配置の特徴：玄関や昇降口付近に教室はない。⇒ 勉強に集中できるように配慮
 - ・保健室は全体を見渡せて、児童の登校の様子などが見渡せる場所にある。
 - ・1年が低層階で、高学年になるにしたがって階が上になっている。
 - ・中学校の教室配置の特徴：図1-2で保健室は昇降口横で、廊下を曲がったところに1年教室
 - ・3年生の教室は2階、2年は3階。受験期に配慮して3年生は2階の職員室に近くに配置

*それぞれの学校で、保健室の配置はどこにあるか、満足しているかをシェアしましょう！

*教員の動線を見てみよう！p.4 図2-1、図2-2

- ・フィールドノートの記録を、校舎配置図に動線を記入したもの（図2-1）。それぞれの場所で何をしていたのかを詳細に記録した図（図2-2）。
- ・養護教諭はp.7 図5-2のC先生。他の教員と違うのは、事務室や印刷室に出入りしていた事。養護教諭に尋ねると、事務室等で雑談する中で、児童の家庭環境や徴収金の未納の状況などの情報を得ていた。養護教諭の仕事は保健室の中で完結するのではなく、様々なところで児童や保護者の情報を得ていることがわかった。

*学校内の掲示物はどこにあって、どういう意味を持っているのかを考えてみよう！p.3表6-1

- ・学校目標などは玄関や教員室にあることが多いが、学校保健関係の掲示物はどこに誰に向けて掲示しているのか考えてみよう。

【まとめと秋葉先生からのメッセージ】

保健室は、教科として関わるよりは、子どもの日常生活や人生にダイレクトに関わる人が多い職種である。時間と空間に意識的になって子どもに関わる人が多いのであるがゆえに、このような作業をすることで、日常を振り返ってみることが大切である。

教員の仕事の特徴として、たえず仕事が分断化されて合間に別の仕事が入ってくるため、自分が置かれた環境の中でいかにバランスを取ってストレスをためないようにしていくことが大切である。今回の研修で自分の流儀を見つけていくきっかけになればと考えている。

養護教諭の仕事は、教師のように発問することで子どもが答え、答えを知っている教師が評価をするという構造ではない。保健室にやってきた子どもに「どうしたの？」と尋ね、回答の主導権は子どもにある。学校の中で「正解」が教師側にあるのではなく、子ども自身の中にある。保健室での子どもとの関わりは、教室と逆転しているのでは？というお話を「IREの構造」に例えてお話くださった。（IREとは、I（イニシアチブ：主導権）、R（リプライ：回答）、E（エバリュエーション：評価）で、教師の発問⇒児童生徒の回答⇒教師の評価のサイクルのことを言う。）

ワークショップで作業を進めながら、自分の日常を時間軸や空間を意識して振り返ることで、あらためて自分の仕事の流儀と向きあえた2時間であった。

《編集 附属校教育研究・研修センター 今宿純男》